

初めての海外 北海道から途上国へ

「わあ、暑いー」
成田空港から空路で約6時間、ベトナム最大の商業都市・ホーチミン。飛行機のタラップを降りた瞬間、もわっと生温かい空気が肌に触れる。

「やっぱり日本と違うなあ」
生まれて初めての海外。言葉では表現できない感動と興奮で息を弾ませているのは、北海道千歳北陽高等学校の生徒たち。道産子である彼らにとって、東南アジアの暑さは一段とこたえるよう。しかし今日から、待ちに待ったスタディーツアーの始まりだ。

新千歳空港から程近い所にある千歳北陽高校は、道内でも先立って、開発途上国へのスタディーツアーを実施して



カンボジアの高校生と日本文化の書道にも挑戦。クメール語の作品もお見事!

などを視察するプログラムになっている。参加者は毎年春、2〜3年生を対象に募集を行い、作文と面接を通じて5人を選考。渡航前の数カ月間は、現地で学びたいことを明確にするため、JICA札幌が行う「高校生国際協力実体験プログラム」への参加などを通じて、みっちり事前学習を行う。

「将来の夢が保育士なので、世界の子どもたちが直面している問題をこの目で確かめたかった」と3年生の藤井はるかさん。「でも実際に行ってみて、完全にイメージは変わりました」と話す。テレビの映像からは分からない現実。そこには、安全な飲み水も十分でない、過酷な環境にありながらも、たくましく生きる子どもたちの笑顔があった。

「将来は、協力隊に参加してみたい」

「さあ、みんなで折り紙をしましよー!」

この9年間、ベトナムでは毎年同じ小学校を訪ねる。それ故に、現地の人も彼らに来るのを毎回楽しみに待っている。昨年は、5人の生徒が、先生となって、ベトナムの子どもたちを前に授業に挑戦。言葉も通じない中で、たった一人、教室に放り込まれた生徒たち。戸惑いながらも、バルーンアートや書道、手品や折り紙など、準備してきた内容を一生懸命披露した。積極性や、発想力。

いる。きっかけは、創立30周年を迎えた2002年、北陽ルネッサンスと称して始まった学校改革プロジェクトだ。より良い教育活動を実現すべく、通常の授業以外にも、千歳JAL国際マラソンへの全校参加、沖縄への体験型見学旅行などの課外活動を積極的に導入。その一つが、途上国へのスタディーツアーだった。「千歳という地域から、世界の人々に思いをはせることができる人間になつてほしい」。そんな先生たちの思いがあった。

訪問国はベトナムとカンボジア。約1週間、現地の孤児院や小学校、博物館



東南アジアに届け! 道産子魂

毎年、東南アジアへのスタディーツアーを実施している北海道千歳北陽高等学校。世界のさまざまな問題に目を向け、物事を広い視野で見られるようになってほしい。昨年で9回目を迎えたこの取り組みは、北の大地から、世界に飛ばたく子どもたちを生み出している。



ベトナム貿易大学で日本語を専攻する学生と交流。「とても日本語が上手でびっくりしました」と渡邊咲奈さん(2年生)

を養うことも、旅の目的の一つなのだ。

一方カンボジアでは、かの有名な世界遺産アンコールワットに圧倒された生徒たち。と同時に、地雷博物館で目にした、大きな鉄の塊は、彼らの心に大きな衝撃を与えた。「この現実を伝えるのは自分たちの役割」といわんばかりにガイドの説明に真剣に耳を傾け、その悲劇の歴史を一つ一つ胸に刻んだ。

さらにアンコール遺跡群の町シエムリアップでは、青年海外協力隊の富永典子さんが活動する小学校も訪問。「単なる交流に終わらず、国際協力力の要素を入れたかった」と宮前邦夫校長は話す。JICAの支援先をスタディーツアーに組み込むようになったのは2年前。生徒たちからは「途上国で活動している日本人に刺激を受けた」という声が続々と上がる。将来の夢の一つに、協力隊が加わった子もいたようだ。



全校生徒で心を込めて折った千羽鶴をベトナムの孤児院に贈った

ベトナムの子どもたちとバルーンアートで交流する2年生の高橋奈実さん。「カラフルな風船をとても気に入ってくれました」。この日のために、いろいろな形が作れるように何度も練習を重ねた



カンボジアのマカラ高校の生徒たちと。「言葉が通じなくても、いつの間にか仲良くなっていました」

帰国後は、校内はもちろん、地域の人たちに対しても報告会を実施する。「最初は恥ずかしがっていた子も、見えるようにハキハキと発表している。現地を感じ、伝えたいことがたくさんあるからでしょうね。私たち教員も共に学んでいきたい」と担当の都築圭吾先生は話す。そして「10年目を迎える今年からは、この活動をさらに発展させていき

い」と宮前校長。4月からは新たな選択科目として「国際協力と東南アジア」を設置することが決まっている。

長い人生の中で、たった8日間のスタディーツアーかもしれない。しかし、生徒たちに「価値観が変わった」と言わしめるほどの貴重な体験になっていることは確かだ。「ベトナムやカンボジアの人たちと出会って、僕たちも今を一生懸命生きなければならぬと感じました」と決意を新たにした本地健太くん(2年生)。同学年の深山主翼くんは「将来自分で稼げるようになったら、募金など僕自身の力で協力できることを続けたい」と話してくれた。

千歳北陽高校での学びを経て、着実に、たくましい若者たちが育っている。